

## まつよひめ 松代姫の由来

天草郡御所浦町大字大浦部落に梅戸と言う水俣に面した小さな湾がある。此処には大浦部落の人の田や畑がある。その畑の隅に古い松が一本ポツンと立っている。その松の根元に古い石碑が建ててある。今は苔に埋もれていてところどころ風化してはいるが

文政二年天辰寅吉祥日

三界萬靈 施主 定

とある。その碑の定と言うのは定平と言って、大浦の黒田豊吉氏の五代前の当主であった。

平家が檀の浦で敗れ、生き残った者達は下関や、吉野川をのぼった祖谷の秘境や九州の中央、五箇荘などの山奥にて一生を終った。

祖谷に落延びた一行の中に若い二人の男女がいた。男は戸田蔵人幸盛の長男幸綱と女は平家の頭領、清盛の娘の松代姫であった。

清盛が厳島神社の造営の為滞在中、神官の娘に生ませた子供で、当時十七才で戦に加って、あえなく敗戦、愛し合っていた幸綱と松代の二人は手に手を取って落ち延び、安住の地を求めてさすらい歩いた。最後に鹿兒島の奈古の浦に将来の生きる場所を求めた。でもここも安全な二人を育む永遠な安住な場所ではなか

った。

意を決した二人は孤島天草に永住の場所を求めて、漁船を雇い奈古の浦を出帆したのは旧暦八月で台風時であった。船が沖合に出た時しげに逢い、松代姫の乗った船は転覆して、死体丈けが大浦部落の梅戸の浦に漂着した。

何と言っても一国の頭領の娘、髪のもの、金銀、サンゴなど飾りものに目をつけた漁師がはぎ取って夜中に海中に突き落したものであった。

それ以後、御所浦島の漁師が月の夜に梅戸の沖を通るとどこからともなく、陣太鼓の音がきこえたり、長唄の美しい唄声が波間を渡ると言われ、神秘的な話が次から次へと伝わって知らぬ間に村の樽離子となり、漁師の網引唄に発展して行った。

松代の碑は、大浦部落の定平と言う人の枕元に若い鎧武者が座って今の話しを涙ながら訴えて、松代の霊をなぐさめる様頼んだ。無論夢であつたらう。

定平氏はそれを心から真に受けて自力で今の場所に小さい乍ら石碑を建立したと言う。